大建築の聖地

2014.02 / Vol.7

第7回　旧島根県立博物館（耐震補強工事・後編）

ピロティの土間をリニューアル

今回の耐震補強工事では、ピロティの外観を維持するため、ピロティに面したトイレを集中的に補強していますが、分厚いコンクリートの補強壁が新設されることによって、トイレの間取りを全面的に変える必要が生じました。

また、トイレの排水経路が変わるため、ピロティの土間の下に埋設されている排水管も改修する必要があり、そのためには土間の仕上げをいったん撤去しなければなりませんでした。

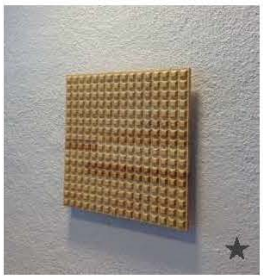
ピロティの床は木型押しのワッフル模様の周囲に、陶片で縁取り装飾が施されたとても味わい深い仕上げです。土間のリニューアルにあたっては、この仕上げを可能な限り忠実に再現することを目指しました。

土間のリニューアルは、木型の製作から始まりました。製作にあたった木工所では、この木型用の加工機械の刃をわざわざ特注され、ほとんど工芸品のような木型を作られました。（※１）

また、縁取り装飾に使用する陶片は、松江近辺の民芸窯から割れた陶器を譲っていただき、それを現場で小割りにして使用しました。

木型押しは左官さんに施工していただきましたが、縁取り部分の装飾は「大建築友の会」メンバーで直営施工しました。（※２）できるだけ元のデザインに近づけられるよう、既存の装飾部分を数ヵ所切り取って保管

※１　木型の試作品をエントランスホールの壁に展示しています。



※２　陶片の埋込作業風景。こんな楽しい現場は経験したことないです！

しておき、それをお手本にしながら作業を行いました。（※３）

独立柱の足下は縁取りの幅が広く、デザインにも特に力がこもっています。

せめてこの部分だけでも保存できないかと検討したところ、幸い、排水管がない部分だったためそのまま保存することができました。新旧の仕上げが寄り添い、なにやら「おじいさん」と「孫」が話をしているような、微笑ましい風景となった気がします。

※３　写真左：改修前（施工:小川惇氏）／ 写真右：改修後（施工：大建築友の会）

菊竹清訓デザインの襖絵を復元

旧博物館の２階にある「公文書センター書架」は、建設当初は「館長室」として使用されていました。そして、館長室と吹き抜けの回廊の間には大きな襖があり、建物の設計者、菊竹清訓氏のデザインによる襖絵が描かれていました。（※４）

今回、その位置に補強壁を設置しましたが、菊竹事務所・元副所長の遠藤勝勧氏から、「その壁に当初の襖絵を復元しては？」とご提案いただいたことがきっかけとなり、作品集の写真等を手がかりにして襖絵を復元しました。（※５）

これまで旧博物館のエントランスホールには空間の中心となるものがなく、少し寂しい感じがしていましたが、この襖絵が復元されたことで、ホールに求心力が蘇ったように感じられます。

※４　残念ながらこの襖は現存しません。誰が捨てたか分かりませんが、もったいないことをしたものです。

※５　襖絵は旧館長室側、吹き抜け側とも図柄は共通ですが、東面（旧館長室）が赤、西面（吹き抜け側）が青であることから、それぞれ日輪と月輪ではないかと推測しています。

洞穴のようなエレベーターホール

昭和44年に増築された新館は、主に中央のホールを挟んで向い合う階段室とエレベーターシャフトの壁が建物を支える構造となっています。今回の工事では、これらの壁を厚くすることで耐震性を高めました。

しかし、この補強によってエレベーターシャフト内が狭くなると、既存の大型エレベーターが昇降できなくなります。このエレベーターは博物館時代から使用されていたもので、老朽化が進み、交換用部品も入手困難な状況だったことから、補強にあわせて

小型のエレベーターに更新することになりました。エレベーターが小型になったことで、出入口の扉が奥へ引っ込み、エレベーター乗り場はまるで“洞穴”のような不思議なスペースとなっています。

間一髪、生き残った丸窓

新館ホールの吹き抜けに面した丸窓は、耐震補強の設計が完了した時点では、補強のため鉄筋コンクリートでふさぐ計画となっていました。丸窓は菊竹氏が好んで用いたデザインであり、菊竹作品の特徴をよく表す部分と言えます。ふさいでしまうのは忍びないため、なんとか保存できないものかと、工事が始まってからも構造設計者と検討を続けていました。

そしていよいよ丸窓をふさぐ工事に取り掛かる直前になって、建設当初の設計図面と実際の建物の寸法に一部食い違いがあることがわかりました。そこで実際の寸法をもとに、もう一度補強計画を見直したところ、丸窓をふさがずに耐震性を確保できる、より合理的な補強壁の配置方法が見つかったのです。

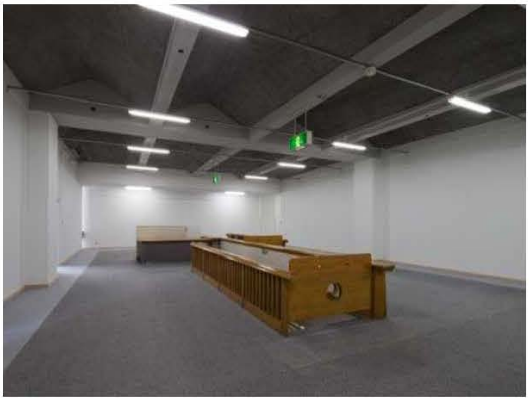
丸窓は、間一髪のところで生き残ることができました。

いつか陽の目を ～旧展示室～

旧館の3階は倉庫として使用していますが、博物館時代には展示室として使用されていました。壁のないフレキシブルな大空間でしたが、その分耐震性が低く、今回の工事でかなり補強を行う必要がありました。

安全性向上のために耐震補強は絶対に必要なことですが、その代償として、建築作品としての大きな“見せ場”であった旧展示室を補強壁で分断しなければならなかったことは、今回工事の最大のジレンマだったと言えます。

しかし、工事完了後に視察された遠藤勝勧氏は、「この展示室は、展示内容に応じて間仕切り壁で仕切ることも想定しながら設計してあります。補強壁で仕切られても、この空間が持つ力はいささかも揺るぎませんよ。」と力強く仰いました。（※６）



いつか再びこの力強い空間が社会に開かれ、活用される日が来ることを祈りたいと思います。

◇ 次回からは、島根県立図書館についてお話しします。

※６　菊竹氏も展示室が耐震壁で分断されることについてはあまり問題にしておられない様子でした。

生前お会いした際、「旧博物館の改修工事にあたって気をつけるべき事は何でしょうか？」と質問したところ、「外部の白い壁は、姫路城の“昭和の大修理”にも携わった腕の良い左官職人に塗ってもらったんです。もし耐震補強で壁を造り替えることがあれば、またその職人を呼んでこないとダメですよ。」と冗談めかしてコメントされました。（実はすでに外部の白壁は吹付け塗材で上塗りされているのですが、菊竹氏には本当のことは言えませんでした…。）

その他にもいくつか注意点を挙げられましたが、どれも再現の不可能な「仕上げ」の保存に関してのコメントであり、「空間」についてはほとんど触れられなかったことがとても意外で、強く印象に残っています。

◇ 写真　（★印を除く）
佐藤和成（SATOH PHOTO）

◇ 参考文献
島根県『島根県庁周辺整備誌』(1972)
菊竹清訓『菊竹清訓 作品と方法 1956-1970』美術出版社(1970)